

袖ノ下捕物帳

胡桃沢耕史





文春文庫

袖ノ下捕物帳

定価はカバーに
表示してあります

1989年11月10日 第1刷

著 者 胡桃沢耕史

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-740205-X

乙庫

袖ノ下捕物帳

胡桃沢耕史



文藝春秋

目次

直根吹一双	7
千両一本突き	28
高田婆	58
ビードロを吹く女	89
解體新書	120
十八大通	152
門出川檢校	184
川越唐棧	214
女湯に刀掛	246

袖ノ下捕物帳

ちよつこんかますいつそう
直根吠一双

丁維翰氏の私記 1

『我が邦くにの光輝ある英祖皇帝のご治世の四十年の年（一七六四）に、計らずも私、丁維翰も関与した、大きな行事があった。

隣国倭国から、九代関白源家重公より十代家治公への家封襲爵の儀が無事終ったとの報告と同時に、年号も明和と改まったとの知らせが届いた。関白家の始祖源家康公が、平秀吉公に代って、江戸に新しい政府を創ってより百五十年目に当る。我が邦でも早速、その襲爵承認と慶祝を兼ねての使者を送ることになった。

我が邦は宣祖四十年（一六〇七）より使節を送っていてこれで十一回目になる。

大使趙曦、副使李仁培、金相翊、以下四七二人である。

私は首都京城郊外仁川府に近い所で、私塾を持つ、無官の貧しい学者であったが、今回五年

前に行われた進士試験の際の、漢学を仲介とする倭国との言語通達の試案という小論攷ろんこうを覚えている考試官がいて、この使節の一員に選ばれる光栄を荷うに至った。

私に与えられた職名は製述官（通詞）である。

私が書いた論攷は、両国の国民は直接に言葉を交えて話すことは殆どできないが、間に紙と筆を置き、漢字を書きながら話を進めれば、ほぼ完全にお互いの意志を通じ合うことができるということの証明を、倭人の学者源璵（新井白石）の書物を中心に述べたものである。

この大きな旅行の一切に関しては、大使、副使ごとに一人ずつ配属された、我々三人の製述官の協力で帰国後ほぼ一年して『海槎録』一卷にまとめ、既に英祖皇帝陛下の御許に提出してある。

私がここに私記として書くのは、その中に意識的に省いた一些事さじである。しかし今を時めく宰相申錫宝閣下の若き日の行蹟に関することである。もし我が家に政変により不測の災が及ぶときには必ず役に立つはずだ。

仁川府の我が貧しき学塾に、突然、王朝よりの勅使が来られたのは、出発の前年の、暮も迫ったころであった。勅命を謹んで拝し初めは任の重さに恐懼きょうくしてひたすら辞退申し上げたが、お聞き入れにならず、ついにお受けすることになった。

年が明けて一月の十五日に、首都京城の景福宮の勤政殿内に於て、使節の全員が、英祖皇帝ご臨席の許に、送別の宴を賜った。このときの官女の舞いの美しさは、海路はるか日東の国へ旅だつ重い憂いの心をしばし忘れさせてくれるものであった。

私たちは使節の一行に加えられると共に、無官の者のすべてが、九品くほんの下より七品の上まで、それぞれの役職に応じての位階に叙せられて私は七品の中の位を賜った。宴果てて後六品の上位以下の下級者はすべて集められ、副使李仁培卿の従事官三品の上の若き青年両班きざく申錫宝卿より、きびしいご注意があつた。

「諸氏の旅行中、最も嚴重に戒められるのは、私貿易である。倭人は諸氏に接触して宴席を設け歓談を求める。これは五品以下の者には個人的に禁止されている。道ばたで話したり、風光地で短い会話を試みるぐらいはかまわぬが、あくまでそれに止とどめて、一片の馳走も受けてはならぬ。それは必ず最後に『人蔘にんじんを少し分けていただけぬか』という願いになるからだ。倭国に於ては人蔘一本は娘一人が遊里に身を売る値と等しい。勿論これも、我が邦が使節の度に運ぶ貴重薬人蔘を、大坂と江戸の幕府認可の定められた数人の商人にしか渡さず、一般市中に流れないようにしているためだ」

青年両班の秀麗な容貌は緊張の余り、蒼白になっている。

「たとえばほんの一本か二本、諸氏の荷の中にまぎれて持って行っても、勿論誰にも分らぬし、倭国滞在中に、その人蔘の重さと同じ黄金に変わる。だが決してこの禁は犯してはならない。たとえばほんの一片でも人蔘を倭人に、私ひそに売った者が居れば、その地の刑場を借りて即時、斬ぎんである。死体はその地に、体、首、相離れたまま放置される」

みなお互いに怖しそうに顔を見合せた。我が邦の民は死後一族の族譜に自分の名を刻みこまれることを最大の望みとする。それには始祖が興った本貫の地に戻り、始祖の墳墓の地の傍ら

に葬られなければならない。死は一瞬の苦痛ですむが、体、頭離れての異国の地での野ざらしは未来永劫の苦を意味する。誰もがここで黄金への誘惑は断ちきったろう。

私も勿論、この大任を身に余る光栄と考え、我が家系統く限りは、子々孫々まで伝えるつもりなので、決して小莖一本も、行李こうりの中に入れようなどとは思ひもしなかった』

壹

上野の山の桜は、この一、二日が一番の見ごろだ。酒は無くても、銭が無くても、花びらが散りかかる下をそぞろ歩きするだけでも楽しい。貧乏人でも、大金持でも花は分けへだてなくその美しい姿を見せてくれる。

……とまで考えたわけではなかったが、上野のお山のすぐ下の、黒門町のそれも路地の棟割長屋に住む猪之吉いのきちは、懷に十手じゅうてをねじこむと何となくお山に向った。陽氣が良くて人が出て賑わう。先だってから目だった事件が起らず、左門の旦那からのお手当て金も切れ、懷はすっからかんでも、蛆虫うじむしが今にも湧き出しそうな長屋に膝小僧抱えてこれ以上くすぶってはいられない。

同じ長屋のかかあ連中が

「もういい加減、お嫁さんをもらったら」

とすすめるが、相手も本気でないことは分っているし、自分でも嫁など来るとは思っていない

い。

岡っ引にはお上からのお手当てがない。出役ごとに、上役からのお小遣いが出る。後は自分で才覚する。平たく言えば脅おどしだ。十手捕縄預る身といっても地回りの与太者とあまり変りはない。それに同じ十手でも与力や同心の諸役の朱房のついたものと違い、金具だけの素十手では、ちらと懷から覗かせてみたところで大きな捕物を一人でするのには貫目かんめが足りない。

上野のお山へ向う道を歩きながら、行き交う春らしく着飾った町娘を眺めては

「まあ、仕方ないさ」

懷の素十手を上から撫でてやや淋し氣に一人で、呟いた。たとえ町娘にはもてなくても、小路の団子屋や、秘ひそかに営業している中条流の婆などには強おつもてし、面さえ出せば、喰物や小銭にはすぐになる。強こわもては強面こわおもてと同じ意味でもあるが、せいぜいがこの程度だ。

生れついでに異相というより醜男ぶおとこ。これはどうにも治しようがない。生れは武州の越生おこせ。

三反歩の田がたとえ豊作でも、四人の子供があつては一家は喰って行けない。生れたときから、双親ふたおやの悪いところばかり合せてできた異相で、よっぽどもう少しで父親にたのまれた取上げ婆が、鼻に濡れ紙あてて、そのままあの世に送るところを、母の嘆願でやっと助かった。だが心の方はそのときからもう歪ひがみでねじくれている。

猪年の生れで猪之吉。十になるかならぬかで黙って江戸へ飛び出し、乞食の仲間から身を起して今は岡っ引だから、たとえ貧乏暮しは相変らずでも出世頭といえはいえる。

猪の二回りが終って九年で今は三十三歳になるがこれでは一人暮しは当り前だ。

人は出身地の越生を訛なまっておこぜ、猪之吉の方もまた訛なまって、ぶたきち、今、おこぜのぶたきちといえ、黒門町からお山にかけては、かなり知る人は知っている嫌われ者だ。

まあ、市中を歩けば、少しは金にもなるかもしれないし、このごろ吉原にも行けず、久しく嗅かがなかった白粉の匂いも、花に浮かれたふりで町娘に顔を近づければ只でゆっくり鼻の穴に吸いこむこともできそうだ。

坂の下の団子屋にいつものようにずいと思って、黙って二皿食べて腹ごしらえして、今にも塩でもまきたそうな顔をしている亭主に

「ごちになったな」

と礼だけ言って、正面からお山へ上りだした。お花の並木が満開で続く。

江戸唯一の遊樂の場所が一番良い季節を迎えて、最高の混雑だ。

十人ぐらいの塊かたまりの一団が、その人混みの中に交ってゆるやかな足どりで上って行く。すぐに追いついた。ちらと見ると、一人の美しい娘と、その父親らしい、裕福な身なりの商人の周りを十人ばかりの番頭、手代、丁稚でつち、そして用心棒代りの鳶とびの親方などが囲んで上って行く。同じ黒門町の薬種商津の国屋の主人と娘のお加世ちゃんと分った。ただ同じ町でも、表の大店おおだなの旦那と、裏の路地の岡っ引では面識はない。黒門町小町と評判が高い娘も、現実に見るのは初めてだ。一目見ただけで魂が天に吹っ飛ぶようだった。同じ人間と生れて、こんないい女を嫁にして毎夜抱く奴が、いつか出てくるのかと思うと、それだけで向っ腹がたって、そいつをしょっぴいて伝馬町のご牢内で、牢奉行石出帯刀様たてわきじきじきの海老責めにかけてやりたくなっ

た。

通行人が噂しあっているのが聞こえる。

「山のお茶屋の一つで、朝鮮国からのご使者のご接待をするそうだ」

「先日のご使者到着の際、津の国屋も、御人蔭お扱いの商人の中に加えられたお礼で、一席持つらしい。どうも相手のご使者が良い男で小町娘が一目惚れというぜ」

「仕出しは八百膳から運ばれ、芸妓もこのあたりのが総出で接待に当るらしいが、それだけでは、真心が足りないというので前から小町娘のお加世ちゃんが高位のご使者のお酌に出ていて見染めたそうだ」

いつも素寒貧すかんぴんの懷で吉原どころか、三十二文の夜鷹の鼻欠け女もご無沙汰の、猪之吉ぶたきちにとつては、聞けば聞くほどけったくそ悪い。

「ちえっ。それではもうでけとるのか」

思いきり唾を吐き捨てると早足で横を通り抜けた。

貳

お山の上に立って、目の下に拡がる大江戸の町を眺め回しているうちに少しは気分が治まった。

大木戸や千住までは、かすんで見えないが、本郷、王子、赤坂、四谷あたりは一望の中にあ

る。そんなときはあの貧乏臭い田舎を離れて、こんな立派な町に暮すことができて

「ああおいらは何て果報者なんだ」

としみじみ思ったりする。その場、その場で物事をあまり深く考えない。少しでも得になるように生きて行きたいだけだ。

おやっと、彼の目が鋭く光った。桜の木の幹によりかかってぼんやりしていたので、目の前を通りすぎた相手の方が気がつかなかった。

お役者の丹治というあだ名の巾着切りきんちやく。評判の猿楽座の二枚目役者、岩村吉弥に似ているというのでかなりの数の町娘が胸を焦がし、実際に近くの中条流なかつりゅうのお常婆さんをこのごろかなり儲けさせている。ついでに猪之吉も大分目こぼし料をかすめ取ったから、満更、恩がないわけではないが、岡っ引と巾着切りでは生れついてからの敵味方、仲好くするわけにはいかない。これまでも何とか狙いをつけて追いつめ捕まえてみたが、いつも必ず、財布の方はとつくに消えていて、証拠がない。どうしても御用にできない。

今日は奴の狙う相手が仕事を始める前から見当ついたから無理に追いかけたりせずに、その場で知らん顔して待つことにした。ゆっくり登ってきた津の国屋の行列が目の前に通りかかったとき、いつの間にかそれを囲む人垣の中にいた丹治が酔っ払ったふりで一行の中によろめいて入り

「こらどうも、とんだことを」

としきりに周りの人に謝りながら出てきた。

確かにその瞬間に仕事がすんでいた。ここで早足や駆足で立ち去るようでは、まだ素人だ。何事もなかったようにゆっくり歩く。充分に考えての上の行動だったろうが、考えすぎて裏目に出てしまった。

気がついたとき、目の前に男が一人立っていた。越生の猪之吉だ。ぎよっとしたが、すぐさり気なく

「これはこれは、親分もお花見で」

いったが、それには答えない。凄味^{すこみ}をきかした仏頂面で脅した。

「相手がいくら薬種問屋でも、そうはうまく卸^{おろ}さないときもあるのよ」

「な、なんのことです。あつしには皆目分りませんが」

「まあ、とぼけても今日だけは無駄だよ。これから自身番にしょっぱいて、下帯^{かんどし}一本になってお体改めさせてもらおうかね」

「と、とんでもない。あつしには何も……」

「何をいつてもまだその懷に印伝の革財布が入^{はい}ってる限り無駄だ。伝馬町の大牢はこれから日増しに蒸し暑くなる。名主や隅の御隠居の腹の虫が悪いと、大体、罪が軽くて男っぷりの良いのから濡れ半紙で夜中に始末される。少しでも人数減らして、風通しをよくしたいだけの理由でな」

さすがに真青になった。証拠の品を捨てたくても、こう正面に立たれてはどうにもならない。丹治一生一代の不覚であった。桜の花がきれいすぎて心に油断があった。がっくりと頭を垂れ